

自治体における 日本語教育実習の場の提供 - 実施報告と今後の課題 -

栗林裕子
(財)兵庫県国際交流協会
日本語教育指導員

1. はじめに

兵庫県国際交流協会は、県の外郭団体であり、1990年設立当初から、外国人に対する支援の一環である日本語教育事業に力を入れている。現在、一般外国人（通年）、留学生（通年、短期集中）、技術研修員（中期集中）などの日本語講座を開催している。また、県内の日本語教師の資質向上への支援とネットワークづくりの推進を目指し、日本語教育ボランティア養成講座の開設、フォーラム、講演会などの開催、日本語教師登録制度の実施などを行っている（資料1）。このような協会における講座の企画・運営や人材の育成、ネットワークづくりの媒介役などを行っているのは、日本語教育指導員である。専門員としての日本語教育指導員の配置は、自治体レベルでは例が少ないが、協会では91年より1名、配置している。

今回は、以上の事業の中から、自治体における日本語教育実習の場の提供ということについて述べたい。この実施に当たっては、91年に姫路獨協大学の日本語学科の大学生、大学院生から教育実習の場を得たいという要望があり、前年から夏季に実施していた留学生のための集中講座を利用して開催することにした。この講座は無料講座であり、時期的にも、また短期集中という形態も、実習する学生にとって都合が良かった。また、教師は現場経験の豊富な民間日本語学校の講師が担当すること、外国人学習者も学習意欲の高い留学生であること、レベルが初級から上級まで4レベルそろっていることなども教育実習には良い条件であった。もちろん受講者には一部が教育実習生による授業であることは、申し込み時に了解してもらった。教育実習には、県内の日本語教育を主専攻に持つ大学の姫路獨協大学、及び神戸松蔭女子学院大学の学生が参加した。なお、94年からは大学からの正式な要請により実施しており、また同年からは桃山学院大学の要望も受け、実習校として受け入れている。¹⁾

以下に、教育実習の概要・方法・事例について報告し、その成果と今後の課題について述べたい。

2. 教育実習の概要

2. 1. 期間及び時間数

教育実習を実施した期間は、第1回（平成3年）から第4回（平成6年）まで毎年7月下旬～8月中旬の3週間、毎週（月）～（金）の計16日間である。

時間数については、事前指導は、講座実施3週間前から毎週土曜日の各3時間、計9時間（3時間×3回）、教壇実習・授業見学は、期間中毎日3時間、計48時間（3時間×16回）、また事後指導は毎日実習後の2時間、計30時間（2時間×15回）である。この事前指導、教壇実習・授業見学、事後指導を合わせると、総時間数は87時間となる。

なお、経費について触れておくと、まず日本語講座の経費は留学生支援事業の一環として県費及び協会の財源により賄っている。そして教育実習のための経費は実習生より10,000円程度を徴収し、それを会議費やコピー代などの実費と指導教師に対する謝礼に充てている。

2. 2. 学習者のレベルと主な教材

講座初日に、学習者に、筆記と聴解のプレースメントテストを実施し、その結果、初級、初中級、中級、上級の4レベル、4クラスに分ける。

初級（A）クラスは、当協会の留学生日本語講座の初級クラス1期の受講者を対象としているため、ひらがな、カタカナをマスターしており、学習時間40時間程度で、初歩的な文法・会話ができるレベルとなる。初中級（B）クラスは、初級前半を終了している人、つまり、基礎的な文法・語彙を習得しており、簡単な日常会話・簡単な文章の読み書きができる人を対象としたレベルである。中級（C）クラスは、初級文法の習得が終わっており、やや高度な文法・語彙、一般的な事柄についての会話・読み書きの習得を目指す人を対象としたレベルである。さらに、上級（D）クラスは、中級段階の日本語能力をすでに身につけており、日本語による言語生活が可能である人を対象としたレベルで、日本語能力試験1級受験希望者が多い。

各クラスの主な使用教材については、平成6年度を例に挙げると、下記のとおりである。

初級クラス	『新日本語の基礎Ⅰ 本冊漢字かなまじり』	AOTS
	『 同上 分冊各国語訳』	AOTS
初中級クラス	『新日本語の基礎Ⅱ 本冊漢字かなまじり』	AOTS
	『 同上 分冊各国語訳』	AOTS
中級クラス	『日本語を楽しく読む本・中級』	SANNO
	『日本語運用力養成問題集3』	凡人社
上級クラス	『朝日新聞で日本を読む』	くろしお出版
	『日本語総まとめ問題集（文法・読解編）』	アスク講談社
	『日本語総まとめ問題集（聴解編）』	アスク講談社

2. 3. 指導教師

指導教師には、兵庫県国際交流協会登録日本語教師の中から、日本語教育に対して豊富な知識・経験があり、人格的な面で、実習生の指導に適当と思われる教師に委嘱する。平成6年度を例にとると、経験年数が、少ない人で4年、多い人で21年の、主に民間日本語学校の教師である。年齢、性別から見ると、そのほとんどは40才代の女性である。

詳しくは、下記の表のとおりである。

(平成6年度例)

教師	年齢・性別	所属機関（全員非常勤講師）	経験年数
教師 a	50代・女性	日本語専修学校（教員養成学科）	12年
教師 b	40代・女性	大学	4年
教師 c	40代・女性	日本語学校（宣教師対象）	8年
教師 d	20代・女性	日本語専修学校	6年
教師 e	40代・女性	日本語専修学校・大学留学生センター	21年
教師 f	30代・男性	日本語専修学校	7年
教師 g	40代・女性	日本語専修学校	9年

2. 4. 実習生

実習生は、県内及び近県大学の日本語教育を主専攻、副専攻とする学生で、原則として学部の4回生か、大学院生である。人数は、平成3年度は5名であったが、4年後の平成6年度には6倍の30人に増加した。参加希望者は今後も増えるであろうが、クラス数、教師数、経費面から見た現状ではこの人数が限界だと思われる。なお、参加学生は全員女性であった。

年度ごとの詳しい内訳は下記のとおりである。

平成3年度 5名（姫路獨協大学：大学院生 2名、研究生 1名
神戸松蔭女子学院大学：学部生 2名）

平成4年度 15名（姫路獨協大学：大学院生 3名、学部生 2名
神戸松蔭女子学院大学：学部生10名）

平成5年度 22名（姫路獨協大学：大学院生 4名、学部生 7名
神戸松蔭女子学院大学：学部生11名）

平成6年度 30名（姫路獨協大学：大学院生 2名、学部生11名
神戸松蔭女子学院大学：学部生 8名
桃山学院大学：学部生 7名、その他 2名）

2. 5. 学習者

学習者は、主に県内在住、または県内大学等在籍の留学生とその家族であるが、若干名、海外大学から夏季休暇を利用して当講座を受講するために来ている学生も参加している。初級、及び初中級クラスには、大学院生、研究生、家族が多く、中級、上級クラスには、学部生、大学院生が多い。国別では中国が圧倒的に多く、また大学別では、その絶対数の多さから、神戸大学が群を抜く。

下記に平成6年度61名の学習者の内訳を示しておく。

内訳（平成6年度例）

（単位：人）

クラス別	男女別	国別	身分別	大学別	
A 10 クラス	男	5	中国 34	大学院生 8	神戸大学 24
	女	5			
B 15 クラス	男	8	ドイツ 5	学部生 13	関西学院大学 3
	女	7			
C 16 クラス	男	9	スリランカ 2	研究生 14	甲南女子大学 2
	女	7			
D 20 クラス	男	7	インド 1	家族 12	武庫川女子大学 1
	女	13			
計 61	男	29	フランス 1	その他 14	大阪電気通信大学 1
	女	32			
			ハンガリー 1		ハイデルベルグ大学 (独) 4
			アレーシア 1		慶州大学 (韓) 4
			パキスタン 1		グローバル大学 (仏) 1
			アイスランド 1		

3. 教育実習の方法

次に、教育実習の方法について、事前指導、教壇実習・授業見学、事後指導の面から述べたい。

3. 1. 事前指導

講座開始前に打ち合わせ会議を3回開催し、日本語講座の概要説明、教材検討・決定、カリキュラム検討・決定、その他、内容、教え方、宿題、評価、プレイスメントテスト、各担当教師間の連絡方法など、細部にわたって教師、日本語教育指導員が検討、確認する。

実習生は会議に参加し、教師間のやり取りを観察することによって、一つの講座を開始させるための準備や、講座運営の仕方を学ぶ。特別な事前指導として、教授法、文法、音声学などの理論的な知識の講義は、実習生が大学で十分に受けており、時間的な制約もあるため、特に行わない。しかし「所謂『語学

教師』としてだけでは捕らえられない) 日本語教師とは」<古川(1993)>という根本的な課題の提示に始まり、学習者への対応の仕方や、絵パネルの扱い方、板書の書き方、学習者の指名の仕方や、その他、現場に立った時に経験不足のために陥りやすい問題点<丸山(1990)>など、実践的な知識について事前指導する。

また、各回会議の後半で、実習生は実習予定表に添って、担当する授業の教案作成について、各自担当教師に指導を受ける。

3. 2. 教壇実習・授業見学

教壇実習は、本来の講座の目的である留学生の日本語教育を第一義的に考えるため、一日3時間の授業の内、1時間を教壇実習に当て、2時間は教師が担当する。教壇実習回数は実習生の人数によって異なるが、3～5回(1回30分～60分)である。授業を担当しない実習生は、予定表に従って4レベルあるクラスのいずれかを1日通して見学する。(次の授業日に教壇実習する学生は流れをつかむため前日に担当クラスを見学する。)

実習生は、毎回、①教師が行った授業の見学後のコメント、②教壇実習見学後のコメント、③教壇実習後の自己評価の3通りを所定の用紙(様式1・2<資料2>、様式3<資料3・4>)に記入し、それをファイルに保存し、期間中誰でも見ることができるようにしておく。③の教壇実習のレポートは、授業者が記入した後に担当教師もコメントを書く。また、全実習終了後には、実習全体のレポートを協会に提出する。

3. 3. 事後指導

午前中の授業終了後、午後2時間、実習生全員はその日の担当教師4人に、実習についての事後指導を受ける。教師は実習生の授業を観察した結果、気づいたことや、教師の授業のポイントなどをコメントする。また問題となった点について、教師が意見を交換し合う。その内容は実習した学生個人のアドバイスにとどまらず、他の学生にとっても有意義で具体的な指導となり、次の実習に活かされる。全体のミーティング終了後、実習生は各自次回の教壇実習の教案について指導を受ける。

4. 実習の事例

この度の阪神大震災によって、当協会の事務所が入っている建物も損壊し、上記の報告書等、この講座の資料のほとんどは滅失してしまった。幸いに5年度の報告書ファイルのみ取り出せたので、他年度のものもこれに準ずると考えられるため、5年度の報告書より実習生のコメント及び教師のコメントの事例(資料3・4)を示す。

4. 1. 実習生の自己評価のコメント

- ・声が小さく、後ろの席の学習者まで聞こえなかった。
- ・早口だった。特にあがると早口になる。
- ・関西のアクセントが無意識のうちに出たり、それを意識すると、なにが正しいアクセントかわからなくなった。
- ・指名がうまくいかず、偏ったり、全体的に発話させる回数が少なくなった。
- ・用意した例文が少なかった。
- ・予想できたはずの質問について準備不足だった。
- ・知識不足で、質問に対して間違った答を言ったり、答えられなかったり、説明がそのクラスのレベルよりも難しくなったりした。
- ・その場で答えられない質問に対する対応が悪かった。
- ・予定外でも十分に答えるべき質問か、またはさらっと流して次に進むべき質問かの判断がつけられなかった。
- ・学習者の言おうとしていることがわからず、対応が遅れた。
- ・未習のものを使わず、既習文法、既習語彙・表現のみで授業をするということが難しかった。
- ・時間の配分が、事前に考えているのとは違い、うまくいかなかった。
- ・準備不足と慣れないため、次の事項に移る時や、絵パネルを見せる時に、間があいてしまった。
- ・各レベル（特に中級、上級）の基準がどの程度かわからなかった。
- ・特に初級クラスで、実物などの教材を用意し過ぎて、手順が悪く混乱したり、学習者を退屈させたりした。
- ・学習者をつい子供扱いしそうになった。
- ・常に学習者全員のアテンションを得るのが難しかった。

4. 2. 教師のコメント

教師のコメントは、上記のコメントと重なるが、さらに教える技術は別にして実習生の日本語教師としての将来有望な資質を認め励ますものや、前回と比較して進歩していることを認めほめるものなどのコメントも多くみられた。また、実習生が細かい点で自分の授業に満足できず、厳しく自己評価していても、教師は、実習生が授業に工夫していたところや、全体のリラックスさせるソフトな雰囲気、朗らかな印象、落ち着いた態度など、実習生が好感を持たれるところを見逃さず取り上げ、勇気づけるコメントもかなりあった。このように客観的な授業の批評だけではなく、教師が励ましのコメントをすることは、相互のコミュニケーションを円滑にし、理解されているという信頼感が生まれ、指導上大変重要で効果的である。実習生を指導する教師は、豊富な知識と経験は言うまでもなく、客観性、人格の3点が備わっていなければならないで

あろう。

5. 成果と今後の課題

5. 1. 成果

まず、実習生の側からの成果について述べる。実習生は大学のカリキュラム（主専攻 675時間、副専攻 420時間）において、そのほとんどは日本語、日本語教育に関する理論を学ぶ。しかし日本語教師として成長するためには実技の教育—「実践の知識」が不可欠である。＜丸山(1990)＞ 実習生は、実際に教えることによってそれを学ぶ。例えば学習者全員に聞こえる程度の声で話すことや、標準アクセントで発音することなどは、理論で学ぶまでもないことであるが、実際にはこの実践が難しい実習生がかなりいる。また文法の知識を十分に持っているにもかかわらず、授業中に質問が出た場合、持っている理論としての知識をそのまま学習者に与えるわけにはいかず、その場で適切な例文をあげることや、既習の語彙・表現で説明することの難しさを身をもって知ることになる。その結果、「理論の知識」は「実践の知識」になるのである。

さらに実習生は、教師から日本語教育の知識や教え方を学ぶだけでなく、授業で日本語を学習する外国人学習者と共に、学習するのである（双学習過程）。²⁾ つまり教師である実習生の質問に対する答や、学習者からの質問を受けることによって、異文化の学習者から自分とは違う価値基準、生き方なども学ぶのである。これについては、特に上級クラスの読解授業の質問などを通して、実習生は、外国人の身になってものを見、感じることによって、外国人に対してより深く理解しようとする能力を培い、また自分のものの見方、存在を知るきっかけを持つという場を得る。

この講座は3週間の短期集中講座であるため、実習生は開講（プレイスメントテスト実施）から修了まで通して参加し、実習の他、教師の手伝い、学習者との交流などを行うことによって、教師、学習者との3者の共生感を持つと共に、修了し得た達成感が得られる。

また、講座のレベルは初級から上級まで4レベルあるので、各レベルの違いを経験することができる。

教壇実習を見学している実習生は、授業についてのコメントを書くが、授業者にとっては自己評価と合わせて、他者からのプラス面、マイナス面のコメントは、自分の授業の問題を把握し、改善する材料となる。また、見学者にとっても、自分の授業を客観化する材料となる。³⁾

次に指導教師の側から、その成果について述べる。上記のことは指導教師にとっても同様のことが言える。つまり実習生は教師の授業を見学することによって、多くの「実践の知識」を得ることができる。教師は見学されることによって、また実習生の授業を観察しコメントすることによって、自分自身の授業

を意識化、客観化して捕らえ、自己評価、自己研修の機会とすることができ
る。この教師の自己研修という点については、教育実習を実施する際の最初の
目標に入っていなかったが、この講座に参加した教師全員が、「(ベテラン教
師であるが故に)教えるということに慣れ、マンネリ化しつつあるところに、
この機会は大変刺激になり、良い勉強の場となった」と感想を述べた。民間の
教育機関に所属する教師にとって、この機会はその所属機関以外の機関で、所属機
関以外の学習者、実習生の目にさらされることになる。その上、講座の開講
時、修了時には、大学の教師や協会の役員等が出席するため、学習者、実習生
以外のさらに公的な評価を意識しながら指導を行うことになる。このような緊
張感の中で、自己を客観的に評価し、また学生から高い評価を得るということ
は、民間の日本語教師が、いかに能力を持っているかと言うことにほかなら
ないのではないか。そして教師はこの仕事を通じて、教師や実習生との強い連
帯感や、達成感を持ち、自信を深めるのである。

最後に学習者の側からの成果について述べる。学習者の反応は、実習生が入
ることについてマイナス評価よりプラス評価の方が多かった。それは、実習授
業が、多くても1日の3分の1で、教師のフォローがあったからということば
かりではなく、教壇実習をしている実習生のひたむきさが感じられたために、
暖かく受け入れてくれたからであろう。⁴⁾ また、教師は授業中も実習生を会
話の相手などアシスタントとして参加させ、学習者は休み時には実習生に質
問などをしていた。実習生と学習者である留学生は、教師、学習者という
より、同じ大学生同士として国際交流の機会を相互に持つことができたよう
である。

5. 2. 今後の課題

今後の課題の第一は、自分の教え方に対する評価を意識化、客観化すること
が挙げられる。実習生が教壇実習した後に、教師や他の実習生からのコメント
を、単なる感想として読むのではなく、マイナス評価も客観的に受け入れるこ
とが、研修に重要且つ効果的な方法であることは理解していても、かなりの精
神的な抵抗を受けることになる。⁵⁾ そのために評価をどのように分析し、客
観化していくかということが、今後教育実習を実施する際に、事前・事後指導
の中心課題として指導教師と共に考え、十分に話し合っていかなければなら
ない点であろう。

第二の課題として、教育実習修了後の研修の場の確保ということが挙げられ
る。教育実習にかかる時間は約90時間であるが、大学の「理論の知識」を学
ぶ時間に比べれば、大学での実習教育を加えても、まだまだ不十分であると思
えられる。そこで、この教育実習を修了した後も何らかの形で、研修を受けら
れる場が必要であろう。それは大学内に留まらず、教師間、機関間のネットワ
ークのなかで考えていくべきである。実習生の何人かは実習修了後、当協会が実

施している日本語講座を見学に来ている。これもひとつの方法であろう。そして、実習、見学後、協会が実施する講座補助などの仕事を経て、日本語教師として巣立っていく例もある。

第三の課題は、経費である。この教育実習のシステムは、平成3年から6年まで毎年改善しこれまでの形にしてきたが、まだ経費の面で考えるべきところがある。それは、この実習は留学生の日本語講座を利用して実施しており、概要で触れているように、日本語授業の経費は県費により計上されているが、教育実習の部分（主に午後の事後研修に教師が参加した際の謝金）は、実習生の参加費と教師のボランティア的な協力により成立している。今後の課題として、実習生から多額の費用を徴収しないのであれば、自治体の理解を得て、教師の報酬分の経費が付き、ある程度独立した事業として成立することが望まれる。

6. おわりに

この教育実習は、大学の要請に応じて、自治体の外郭団体である兵庫県国際交流協会が教育実習の場を提供するものである。日本語教師を目指す学部生、大学院生が実習生として参加し、外国人学習者として、大学で学ぶ留学生やその家族が受講する。そして学習者、実習生を指導する教師は、協会の登録教師であると共に、そのほとんどは様々な民間の日本語学校で教えている教師である。

受講した留学生は、これらの教師に、大学に入学する前に日本語学校で教わったり、入学してから大学の留学生センターで教わったりするなど、協会の講座以外の場でも関わりを持っている。

実習生は大学で得た知識以外に、教師になるために不可欠な実践の知識を、現場の経験豊富な民間学校の教師によって与えられる。さらに、様々な個性ある生身の教師像を目の当たりにし、その魅力に触れ、意見を聞くことによって、日本語教師の仕事について原寸大で理解できる機会を持つ。

そして教師は指導することによって、実習生、学習者から高い評価を受けると共に、自己開発の機会を得る。また、教師間でも、別々の日本語教育機関で働く人々が集まるため、大変有益な相互の情報交換の場を持つことになる。さらに、それまであまり接する機会がなかった日本語学科の学部生や大学院生と親しく交わることによって、大学、大学院レベルの日本語教育内容に興味を持ち、大学、大学院での勉強を考える教師も出てくる。教師の「与える」ことによって起こる「さらに指導したい、研究したい」という欲求は、教師の力を最大限に引き出すのである。

自治体は教育実習の場を提供することによって、これに関わった教師や学生たちの資質向上に貢献するのはもちろんのことだが、彼らが地域の機関の教師

や、ボランティアグループの指導者として活躍することによって、地域全体の日本語教育が大きくレベルアップしていくことが期待できる。

以上のように、一つの教育実習という事業を通して、大学、学生、留学生、民間日本語教育機関の教師、自治体というネットワークができ上がり、一方が情報を投げかけ、他方が受け止めるという静的ネットワークではなく、互いに情報を交換しあい、影響を与えあっていくという動的ネットワーク<林・尾崎(1993)>ができ上がるのである。

これを教育実習という一事業にとどめず、兵庫県全体の日本語教育の動的ネットワークを作り、広めていくこと、そして、兵庫県国際交流協会がその拠点となることが、協会の日本語教育の願いであり、目標である。

それを目指して、昨年、当協会の登録教師制度に参加している教師の自主的な活動の場として「登録教師連絡会議」を発足させ、ネットワーク作りの第一歩を踏み出した。この連絡会議のメンバーは現在約90名で、民間日本語学校、日本語教員養成学校、大学、インドシナ難民定住促進センター、ボランティアグループ、研修センターなど、様々な場で日本語教育に関わっている人々の集まりであるため、これらの人々が、ネットワークを作り、人的交流を通じて、それぞれの機関へネットワークの輪が広がっていくことを大いに期待している。

注

- 1) なぜ大学の日本語教師養成課程の実習部分を、カリキュラム以外で補う必要があるかということに触れておきたい。日本において1988年の「日本語ブーム」以来、外国人に日本語を教えたいという日本人が急増し、「日本語教師ブーム」をつくっていることは良く知られている。<丸山(1990)>文化庁文化部国語科の調査(1993)によると、日本語教員養成機関・施設で、89年から93年までの5年間のうち、一般養成施設は、71機関から108機関へと52%の増加に対し、大学院・大学・短期大学は、合わせて50校から111校へと122%の増加である。受講者数に至っては一般養成施設が、5,894人から6,531人へと10.8%増に対して、大学等は3,378人から15,421人へと356%の驚くべき増加率である。このような大学関係出身の教師が増える状況のなかで、大学のカリキュラムは、知識、理論に重点が置かれ、実践教育は一般の養成機関に比べて比重が軽く、経験を積むチャンスが少ない。大学の教育実習についての一番の問題は「場の確保」である。これに対して大学の多くは模擬実習で代替したり、海外実習プログラムを組んだりしているが、参加人数、費用など問題点は多いようだ。1995年(社)日本語教育学会の『日本語教育の概観』においても、実習の必要

性と問題点について述べられている。

- 2) 岡崎敏雄・西川寿美(1993)「学習者とのやりとりを通じた教師の成長」の論文中で、対話的問題提起学習を通して教師が学習することについて、(1) 教師が問題提起者の側に立った場合と、(2) 外国人学習者が問題提起者の側に立った場合に分け、詳しく述べられている。
- 3) これについては、岡崎敏雄(1991)「自己研修の方法」、尾崎明人(1991)「自己研修型の教師をめざす教師のためのタスクブック」の論文に詳しい。
- 4) 丸山敬介(1990)『経験の浅い日本語教師の問題点の研究』(p.270)において、実習生は自分自身の知識のなさ、経験のなさを十二分に自覚しており、それが指導に際しての自信のなさ・とまどいになって表れたが、その一方で、それが謙虚さ・誠実さに転化した部分があり、学習者には友好的に迎えられたと考えられると、述べられている。
- 5) 教授過程の意識化と、その事例と考察については、Gehertz 三隅友子・才田いずみ(1993)「教授過程の意識化を通じた専門性の開発」の論文に詳しい。

参考文献

- 1 丸山敬介(1990)『経験の浅い日本語教師の問題点の研究』 創拓社
- 2 文化庁文化教育部国語課(1993)『平成5年度国内における日本語教育の概要』
- 3 日本語教育普及協会(1993)『めざせ日本語教師』 三修社
- 4 (社)日本語教育学会(1993)『平成4年度日本語教育研修会実習課程－報告書－』
- 5 (社)日本語教育学会(1994)『平成5年度日本語教育研修会実習課程－報告書－』
- 6 (社)日本語教育学会(1995)『日本語教育の概観』
- 7 お茶の水女子大学日本言語文化専攻(1992)『1992年夏期 日本語教育実習の記録』
- 8 お茶の水女子大学日本言語文化専攻(1993)『1993年夏期 日本語教育実習の記録』
- 9 大学日本語教員養成課程研究協議会(1995)『大学教員養成課程における日本語教育実習事例報告書』
- 10 岡崎敏雄(1991)「自己研修の方法」『自己評価、自己研修システムの開発をめざして』文部省科学研究補助金研究「日本語教師の教授能力に関する評価・測定法の開発研究」

- 11 尾崎明人(1991)「自己研修型の教師をめざす教師のためのタスクブック」
『自己評価、自己研修システムの開発をめざして』文部省科学研究補助金研究「日本語教師の教授能力に関する評価・測定法の開発研究」
- 12 奥田邦夫(1991)「大学の日本語教育の現状と問題点」『日本語教育の現状と課題』講座日本語と日本語教育 第16巻 明治書院
- 13 J.V.ネストラー(1991)「日本語教師養成と日本語教育能力検定試験」『日本語教育の現状と課題』講座日本語と日本語教育 第16巻 明治書院
- 14 春原憲一郎(1992)「ネットワーキング・ストラテジー—交流の戦略に関する基礎研究—」『日本語学』VOL11,10月号 明治書院
- 15 古川ちかし(1993)「日本語教師の専門性の再検討」『日本語学』VOL12,3月号 明治書院
- 16 山田泉・丸山敬介(1993)「日本語教師の自己開発—発想の転換と実践的能力の形成」『日本語学』VOL12,3月号 明治書院
- 17 岡崎敏雄・西川寿美(1993)「学習者とのやりとりを通じた教師の成長」『日本語学』VOL12,3月号 明治書院
- 18 Gehrtz 三隅友子・才田いずみ(1993)「教授過程の意識化を通じた専門性の開発」『日本語学』VOL12,3月号 明治書院
- 19 林さと子・尾崎明人(1993)「動的ネットワークと教師の成長」『日本語学』VOL12,3月号 明治書院
- 20 国立国語研究所日本語教育センター第一研究室(1991)「4年制大学における日本語教員養成の現状」『日本語教育の内容と方法についての調査研究』資料(7)
- 21 国立国語研究所日本語教育センター第一研究室(1992)「日本語教員養成における海外教育実習プログラム」『日本語教育の内容と方法についての調査研究』資料(8)

(財)兵庫県国際交流協会 日本語教育事業

1 日本語講座の開設

(1) 在県外国人日本語講座

在県一般外国人の日本語能力向上のため、年間を通して日本語が学べる講座を開設する。

- [時期] 1期 5月初旬～7月中旬
2期 9月初旬～11月末
3期 12月初旬～2月末 (毎週火・金曜日)
- [時間数等] 各期20回/40時間 計120時間
- [場所] 兵庫県中央労働センター
- [人員] 初級、中級各1クラス 計30名<各期>

(2) 留学生夜間日本語講座

留学生及びその家族の日本語能力向上のため、夜間通年講座を開設する。

- [時期] 1期 5月初旬～7月中旬
2期 9月初旬～11月末
3期 12月初旬～2月末
春期 3月初～3月末 (毎週火・金曜日)
- [時間数等] 各期20回/40時間 (春期8回/16時間)
計136時間
- [場所] 兵庫県中央労働センター
- [人員] 初級、中級、上級各1クラス 計45名<各期>

(3) 留学生夏期集中日本語講座

留学生及びその家族の日本語能力向上のため、夏休み期間を利用した講座を開設する。

- [時期] 7月下旬～8月中旬
- [時間数等] 1日3時間 16日間 計48時間
- [場所] 兵庫県中央労働センター
- [人員] 初級～上級 4クラス 計60名

※なお、この機会を利用して県内大学の日本語学科学生に教育実習の場を提供する。

(4) 海外技術研修員日本語講座

海外技術研修員の日本語能力向上のため、集中講座を開設する。

〔時 期〕 6月中旬～7月末 (月)～(土)

〔時間数等〕 185時間

〔場 所〕 兵庫インターナショナルセンター

〔人 員〕 初級・初中級・中級 3クラス 計39名

(参加地域) 兵庫県16名、徳島県8名、鳥取県2名
大分県11名、山口県1名、神戸市1名

2 日本語教師の資質向上への支援とネットワークづくりの推進

(1) 日本語教育ボランティア養成講座の開設

県内の外国人の増加が著しい地域において、日本語教育の必要性及びその方法についての啓発を行うとともに、ボランティアを対象として日本語教師の養成を行う。

〔時 期〕 開催地域と検討の結果決定

〔時間数等〕 1回5時間 6回 計30時間

〔場 所〕 県内の外国人の増加が著しい2地域

〔受講者数〕 30～50名

(2) 日本語教育研修会の開催

日本語教育の普及、県内日本語教師の資質向上とネットワークを形成するため日本語教育関係者を対象とした研修会を開催する。

〔時 期〕 未定

〔場 所〕 神戸市内

〔対 象〕 日本語教師、日本語教育関係者等

(3) 日本語教師登録制度の実施

本協会が開設する日本語講座において日本語教育を行うことを希望する者を登録し講座の教師を委嘱するとともに、講師間の自主的な資質向上の取り組みに対し支援を行う。

(様式: 1)

平成6年度夏期集中日本語講座
教育実習見学自己録書 (教師視観見学)

見学者 _____

実習日: ____年__月__日 (____曜日) ____時限
クラス: _____
教科書: _____ 第 ____ 課
教師: _____

Blank area for writing the observation log.

(様式: 2)

平成6年度夏期集中日本語講座
教育実習見学報告書

見学者 _____

実習日: ____年__月__日 (____曜日) ____時限
クラス: _____
教科書: _____ 第 ____ 課
実習担当者: _____

(授業についての感想)

- ・声の大きさと発音: _____
- ・生徒のアテンションを得ているか: _____
- ・文法説明のしかたについて: _____
- ・教材について _____
(DVD等、表、Flashカード、実物など): _____
- ・生徒からの質問の応対のしかたについて: _____
- ・生徒の反応、理解度について: _____
- ・クイズ/宿題について: _____
- ・よかった点: _____

- ・困った点: _____

- ・その他: _____

Blank area for writing the report, containing the list of reflection questions.

平成5年度夏期集中日本語講座
教育実習報告書

担当者 S. I

実習日: 1993年 8月 5日 (木 曜日) II 時限

クラス: Aクラス

教科書: しんにほんごのきそI 第 18 課

見学者: (A)・(B)・(C)・(D)

(授業についての自己反省)

- ・声の大きさと発音: 声こゑが小さくなり、口調くちうも速はやくなりがちだった。アクセントも直す余裕ゆとりがなかった。
- ・生徒のアテンションを得ているか: アテンションを得ることに必死ひっしになり、無駄むだ口くちが多く内容から外れることもあった。
- ・文法説明のしかたについて: 「～まえに」の導入の際、「～てから」を使い学生を混乱こんらんさせてしまった。
- ・教材について 絵パネルえぱんねるの使い方が下手で練習がテンポテンポ良くできなかった。自分で (A)DF外、表、フラッシュカード、実物じぶつなど)用意よういしたチャートのコピーや写真は小さく見にくかった。
- ・生徒からの質問の対応のしかたについて: 完全にうろたえてしまい、きちんと対応せず、うやむやにしてしまった。
- ・生徒の反応、理解度について: 学生の興味きょうみをひこうとするあまり、辞書形じしょがたや文型ぶんがたの理解りかいをさせることがあ
るそかになってしまった。
- ・クイズ/宿題について: _____
- ・よかった点: 学生の方々がとても協力的で、私のいたらない点をカバーしてくださった。雰囲気作りきふきに力を入れたことを察さつしていただけたのか、割わりと自発的に発話はつごしてもらえたと思う。
- ・困った点: 不用意よういに使ってしまった言葉「うつつています」の説明、また予期よきしなかった「水族館すいぞくかん」の説明、時間が足りず、用意よういしていた練習が全部できなかったこと、あがってしまい自分でも何をいっているのかわからないことがしばしばあったこと。
- ・その他: 自己紹介を忘れて授業を始める等、かなりあがっていて、学生の理解を確かめながら授業をすすめることができなかった。途中、辞書形じしょがたや文型ぶんがたをきちんと整理するつもりでいたのに、反対に板書ばんしょをはずしてしまったり、説明を簡単にしてしまったので、学習内容のポイントがあさえられていなかった。指名する際、ランダムにあてたので誰にあてたかわからなくなってしまい、指名しめいもらしがあつたようだ。なるべく学生一人一人とのコミュニケーションを大切にしたいと思うあまり、個人的な無駄むだ口くちが多かった。学習内容から外れない程度のやりとりの仕方の難しさを思い知らされた。自分自身に何も蓄積ちくせきされていない状態で、今回の実習に参加さんかさせていただいているため、どうしてもほかの実習生の方のまねや先生方のまねになってしまいがちで、また学生からの質問にもうろたえていることしかできず、もっと勉強べんけんしなければと思った。

(担当講師から)

- ・はじめから自然に授業に入り、全体の流れがよく、授業を楽しんでいるように感じられたし、絵教材の準備もよく、生徒の興味きょうみをひいたと思います。
- ・新しい言葉が突然出てきたときには、あわてないで、いろいろな例をあげたり、黒板くろばんに絵を描いたりして、何とかわからせるように努力どりょくすべきだと考えます。
- ・リピートさせる時は、短い文からはじめ、なれてから長い文にうつるようにすると、楽やすにリピートさせられます。
- ・未習の語彙ごごいは使わず、何とか既習語彙きじゆごごいで表現するように考えてください。

平成5年度夏期集中日本語講座
教育実習報告書

担当者 Y. M.

実習日: 1993年 7月 28日 (水 曜日) I 時限

クラス: Cクラス

教科書: 日本語を楽しく読む本・中級 第 3 課

見学者: (A)・(B)・(C)・(D)

(授業についての自己反省)

- ・声の大きさと発音: 声が小さすぎて後ろの学生さんまで聞こえていなかったの、聞きづらい授業だったと思う。
- ・生徒のアテンションを得ているか: 色々な所に動きすぎたため、私が行く所以外の人には下を向いている人がいた。
- ・文法説明のしかたについて: 自動詞、他動詞の説明はこのクラスにはあまり意味がなかったようだ。
- ・教材について 板書の仕方が雑であったような気がする。
(ハンドアウト、表、フラッシュカード、実物など): _____
- ・生徒からの質問の対応のしかたについて: 「女房」の説明の仕方が適切でなかった。
- ・生徒の反応、理解度について: 声が小さかったため、前の生徒しか反応していない面があった。
- ・クイズ/宿題について: _____
- ・よかった点: 学生と共に考えながら、問題に答えられたので(のんびりしすぎたが)良かったと思う。
- ・困った点: 声が小さかったので学生に質問をしても、もう一度聞き返されるということが多かった。時間がオーバーしすぎてしまった。
- ・その他: 初めての实習ということで、前に立ったとたん緊張してしまい訳が分からなくなってしまい、声も小さすぎて、後ろの人まで聞こえなかったようで学生に申し訳なかったと思う。広い部屋で学生の人數も多くて緊張したが、学生に見守ってもらった部分もあり、いい経験ができたと思うので今日の反省を生かして次回の実習に生かしたい。

(担当講師から)

本文の内容をよく検討し、質問の答を誘導するための準備が感じられ、学習者が協力的になりました。最後に拍手が起こり、私も嬉しかったです。

ただ声が小さかったこと、個人別の対応の仕方、クラス全体の注意をずっと引きつけ続けることはできなかったのが残念です。レベルに適当でないことがらで時間を無駄使いたないようにすることが大切です。